

詩篇66篇より

【第一部】 民との契約関係を破ることのない神を賛美せよ

指揮者のために。歌。賛歌

- 1 全地よ。神に向かって喜び叫べ。
- 2 御名の栄光をほめ歌い、神への賛美を栄光に輝かせよ。
- 3 神に申し上げよ。「あなたのみわざは、なんと恐ろしいことでしょう。
偉大な御力のために、あなたの敵は、御前にへつらい服します。
- 4 全地はあなたを伏し拝み、あなたにほめ歌を歌います。あなたの御名をほめ歌います。」セラ
- 5 さあ、神のみわざを見よ。神の人の子らになさることは恐ろしい。
- 6 神は海を変えて、かわいた地とされた。人々は川の中を歩いて渡る。
さあ、私たちは、神にあって喜ぼう。
- 7 神はその権力をもってとこしえに統べ治め、その目は国々を監視される。
頑迷な者を、高ぶらせないでください。セラ
- 8 国々の民よ。私たちの神をほめたたえよ。神への賛美の声を聞こえさせよ。
- 9 神は、私たちを、いのちのうちに保ち、私たちの足をよろけさせない。
- 10 神よ。まことに、あなたは私たちを調べ、銀を精錬するように、私たちを練られました。
- 11 あなたは私たちを網に引き入れ、私たちの腰に重荷をつけられました。
- 12 あなたは人々に、私たちの頭の上を乗り越えさせられました。
私たちは、火の中を通り、水の中を通りました。
しかし、あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。

【第二部】 個人的契約関係を破ることのない神を賛美せよ

- 13 私は全焼のいけにえを携えて、あなたの家に行き、私の誓いを果たします。
- 14 それは、私の苦しみのときに、私のくちびるが言ったもの、私の口が申し上げた誓いで
す。
- 15 私はあなたに肥えた獣の全焼のいけにえを、雄羊のいけにえの煙とともにささげます。
雄牛を雄やぎといつしよに、ささげます。セラ
- 16 さあ、神を恐れる者は、みな聞け。神が私のたましいになさったことを語ろう。
- 17 私は、この口で神に呼ばわり、この舌であがめた。
- 18 もしも私の心にいたく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。
- 19 しかし、確かに、神は聞き入れ、私の祈りの声を心に留められた。
- 20 ほむべきかな。神。神は、私の祈りを退けず、御恵みを私から取り去られなかった。

これまでに学んできた多くの詩篇の特徴は、詩人の個人的な経験から始まり、最後に、取り戻された神との関係が民全体に向けて拡大されるというものでした。しかし、本篇はそのパターンと真逆であり、前半で全世界に対する賛美の要請があり、後半で個人の証へと縮小されます。形としては以下のような二部構成になっています。

第一部：民との契約関係を破ることのない神を賛美せよ（1-12節）

第二部：個人的契約関係を破ることのない神を賛美せよ（13-20節）

まず、本篇のオープニングのイメージが大変明るいことに気づかされるでしょう。書き出しは100篇の「全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ」と似ており、人類だけではなく全被造物に対する賛美の要請でもって始まります。星の煌めき、海の轟き、森のざわめき、動物の鳴き声までもが賛美の声として一致する情景です。

3節、5節で「みわざ」という言葉が繰り返し登場し、神が過去になされた救いの御業が想起されていますが、それは6節で明らかにされるように、イスラエルがエジプトでの奴隷生活から解放され、ヨルダン川を渡ってカナンの地に入っていくことを表しているでしょう。ヨシュア3:14-17には、ヨルダン川の水が堰き止められ、民全体が乾いた地を渡って行った様子が描かれています。渡った先は「ギルガル」という地で、そこで民は12個の石を並べ、神の救いの御業を「しるし」として残しました(ヨシュア4章)。

さて、この出エジプトの出来事は神の救いの基礎となり、その後のイスラエル史の中で繰り返しパターンとなって現れました。民が敵によって苦しめられ、救いを求めて叫び、神がその祈りに応えるという形です(士師記などに顕著)。神が生きて働き給う方であることを詩人は全世界に証しし、礼拝を求めているのです。

8～12節では、カナンの地に入っていくまでの荒野の40年の経験が語られているでしょう。民はその期間に、全生活において神に頼ることを学ばされました。食べ物も、飲み物も、戦いへの勝利も、すべてが信仰によって神から与えられるものであることを一つひとつ学んでいったのです。しかし、試練の中で神に反逆した多くの者は滅ぼされ、信仰にたち続けた者だけがカナンの地に入って行きました。「銀を精錬するように」(10節)、「腰に重荷をつけ」(11節)「火の中を通り、水の中を通り」(12節)といった表現が出てきますが、これらはすべて神が民にお与えになった試練であり、その信仰が本物であるかどうかを試し、振るいにかけたことを言い表しています。

私たちの人生に度々訪れる試練は、その渦中にあるときは苦しいけれど、それによって信仰が精錬されようとしていることを忘れてはなりません。自分は何によって生きている者なのか、真に頼りとしているものは何であるか、それが明らかにされる時なのです。金や銀は高温の炉で溶かして不純物が取り除かれます。試練を生き延び、信仰が研ぎ澄まされ、「豊かな所」(字義的には「飽和」「溢れ」)へと導かれるのです。

13節以下は「第二部」となり、詩人が個人的に神を賛美し、感謝のいけにえをささげている姿が描かれています。イスラエルにもたらされた救いの御業が、自分の人生のあらゆる場面にも現れていることを詩人は見出しました。彼がどのような試練を乗り越えたのかは明確に描かれていませんが、18万5千人のアッシリヤの大軍を神が一夜にして滅ぼしてくださったのを見たヒゼキヤ王の経験が背後にあるのではないかという説もあります（Ⅱ歴代32章）。あるいは、もっと身近な病からの回復のような出来事かもしれません。

いずれにせよ、詩人は祈りに応えてくださった神に感謝をささげることを忘れませんでした。彼は「全焼のいけにえ」（13節、15節）をささげ、自分の徹底した献身を表明しました。このいけにえは、彼がかつて祈ったときに、「この祈りに応えてくださった暁にはあなたに対する全き献身のしるしとしておささげします」と誓ったものだったのでしょうか（13節）。

18～20節は「聖書的三段論法」と言われます（小畑）。大前提として「もしも私の心にいづく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない」（18節）と言われ、詩人の心が試されます。次に、小前提として「しかし、確かに、神は聞き入れ、私の祈りの声を心に留められた」（19節）と言われ、詩人の心に不義がなかったことが証しされます。そして、結論として「ほむべきかな。神。神は、私の祈りを退けず、御恵みを私から取り去られなかった」（20節）と締めくくられます。この三段論法の自然な流れで言えば、詩人は自らの心の誠実さを誇ってもよいところですが、そうではなく、祈りを聞き入れてくださった神、恵みを取り去り給わなかった神を誉め讃えるところへと導かれています。高ぶりではなく、へりくだった心。自分がささげた祈りも、真っ直ぐな心も、すべては神から出ているものであった。一切は、私との契約を破ることのない神の恵みに基づくものであるという結論です。

66篇の第一部と第二部は、民に対する神の救いの御業と、個人に対する救いの御業で、一見つながりなき二つの出来事のように見えますが、そうではありません。聖書に描かれている「イスラエスの救い」は、まさしく私たち個人の生活の中にも現れてくるのです。民が試練に遭ったように私たちも試練に遭い、信仰が試され、精錬された銀のように神との一対一の関係が研がれるのです。神との関係が近くなればなるほど、その恵みを見せてくださっている神の御業が澄んだ瞳で見極められるようになることでしょう。